コスモ

香月　宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コスモ

【Ｎコード】
Ｎ０８３２Ｄ

【作者名】
香月　宙

【あらすじ】
僕はこんな「力」なんていらない！！僕に何をさせようというんだ・・・・そして・・・・いったいおまえは・・・・僕は何者なんだ・・・・

双子

バタン！
「うわぁ～！！どいて　どいてぇ～！！」
勢いよく飛び出してきた妹と　階段でぶつかりそうになった。
その瞬間に
「痛っ・・・」
僕の肘に激痛が走った。

「ういってくぃまぁ～す！！」
パンをくわえたまま走り出す妹の肘に　包帯が巻かれているのを見逃さなかった。
（やっぱり・・）

「あらあら・・気をつけなさいよ～！！」という母に　いつもの笑顔の見つけた。

よかった。たいした事なさそうだな。

「たーくんも早くしなさいよー！！」
「わかってるよ。ひなは朝練か？」
「そうなのよ。昨日肘が痛いって泣いてたくせにね。」
「頑固だからな　ひなは。」

いつもの朝　いつもの会話　・・・
それが徐々に色を変えていることに　最近気づき始めた。

僕は　ある「力」を持っているらしい。

それは
双子の妹『ひなた』に起こっている事を　彼女に触れることで瞬時
にわかるのだ。

それは　多くの双子にありがちな
一緒の行動　一緒の感性　一緒の結果だけでは済まされない
というところまで確信し始めた。

僕がその「力」に気づいたのは　中学生になった頃だった。
それまで　双子であるがために　何をするにもずっと一緒だった生
活パターンも
男女という仕切りで　体育や　家庭科や　部活動など　別々の枠組
みになっていった。

体育でころんだ記憶
家庭科で針が刺さった記憶
テニスで腕が上がらなくなるほどの素振りの記憶

あるわけがないそんな記憶の数々が　触れたその瞬間に感覚として
残るのだ。

最初の頃は　当然理解できずに　≪偶然≫とか≪双子の宿命≫とか
そんなんで　自分のその「力」をごまかそうとしたし　認めたくな
かった。

しかし　時はすぎ　別々の高校へ通うころ
その事件は起こった。

サッカーの練習で遅くなった夜。リビングに入った僕の目に飛び込
んだのは

泣きながら母に抱きついている　ひなだった。
長かった髪がバッサリと切られ　テニスのラケットもガットが切れていた。
一目で「いじめ」だとわかった。

「ひ・・ひな・・大丈夫か？・・・」
「あ・・たーくん。」
「うん・・もう大丈夫だよ。」
「そうか・・短い髪もいけると思うぜ！」

あ・・・・・・・・ああああ・・・・

思わず触れたひなの髪から
その恐怖　怒り　驚き　すべてが僕の中に流れ込んできた。

振り回されるはさみ
髪を　ひっぱりつかんで離さない　日焼けした手
「生意気なんだよ！！」怒鳴る声

目隠されたのか・・
だが・・恨みにゆがんだ女子高生の顔が見える。

あぁ・・・・こいつ・・誰なんだ・・

双子の僕が言うのもなんだが
妹のひなたは　顔は　まぁ世間で言う「かわいい」タイプ（ということにしておこう）
で、運動神経だけは　なかなかのもんで
中学時代も数々の校内記録を塗り替えてきた。

その運動神経と　中学からのテニス漬け　負けず嫌いが功を奏し
高校入学すると　メキメキ頭角を現し
先輩方を差し置いてのレギュラー入りとなった。
その「嫉妬」って事なんだろうなぁと　漠然と感じた。

その時はそれで終わったのだが
しばらくして　ひなのテニス合宿の写真を見た時
こいつだ・・
そして確信した。ぼくの「力」・・・

【サイコメトリー】

双子の妹が　極限の恐怖や怒りを感じた時だけ　その「力」は現れるらしい。

・・と思っていたのだが・・・
そんな「力」にも慣れっこになってきた最近
流れ込んでくる　ひなの記憶の映像に　「あること」があるのに気づき始めた。

そう最近色を変え始めたという　その事実だ。

その「あること」とは
映像として観るその記憶に　何かの文字？らしき物が見えるのだ
象形文字のような　難しい古代文字のような・・

しいて言うなら　『幾何学模様文字』とでもいうようなものなのだ。

だが・・・

違和感が無いのが　不思議なのだ。

むしろ

なつかしい　とでもいいたいような感覚なのだ。

ひなたの日記

6月22日
超最悪！！！　いったいなんなの！？
「生意気なんだよ！」ってあの声。絶対　冴子先輩だ。
別に髪の毛切られるくらいどってことないけどさ
やり方が嫌味だよね。
テニスで負けたんなら　テニスで仕返するのが当然でしょが！

あ～あ。いやんなっちゃう。
明日　平気な顔して「あら　髪切ったのね。テニスに長い髪もねぇ・・」
とかなんとか言うんだろうなぁ。むかつく！
ま、とりあえず今日はびっくりして　どうにかなっちゃうかと思ったけど
あんな先輩たちなんか　無視！無視！だよね！

美奈先輩や　翔子たち　明日きっと驚くだろうなぁ。
なんか　そっちのがちょい楽しみ。

それと・・またやっちゃったって感じだな。
どうして　ああいう時『たーくん！！助けて！』って心で叫んじゃうんだろ。
ずっと一緒だったころからの　なごりってやつですかねぇ。
高校が別々になってからは　ほとんどすれ違いばっかだもんなぁ。

でもさ、相変わらず　ナイスフォローって感じ。
たぶん　いじめとか分かってるはずだよね。
でも　そこに触れないでいてくれたの　超助かった。うんうん。い

いやつだ。

なんでも分かっててくれる人がいるって　すごく心強いぜ！
双子ならではの信頼関係ですな。
私が一方的に頼りすぎって気もしなくはないが・・うへへ。
たーくん　これからもよろしく！！（私に彼氏ができるまで！）

7月6日
超驚き！！！柳下にこくられた！！
あひゃひゃ～！！っていうかさぁ
なんで　柳下なの？
どーでもいいけどさ。由布子に恨まれちゃうよ。
その気ありませ～んとか　一応おちゃらけといたけどさ。
なんか・・・まずい雰囲気だよな。
えー・・・ビミョ～・・・

柳下かぁ。
確かに　かっこいいし　頭もそこそこだし　優しいし・・・・・・・・・
でも　な～んか違うんだよねぇ。

う～ん・・・私・・・たーくんと比べてる？
たーくんって双子だけど　顔も似てないし　性格も違うし
だからかなぁ。頼りになる兄貴っぽいっていうか　むしろ・・理想の彼氏ってか！？。。。
あは☆こんな事　たーくんにばれたら　それこそアホだと思われるよ。

ま、そのうち　たーくんなんか虫けらくらいに思えるほど
超ーいけてる彼氏が　きっと白馬に乗って・・・

キャ〜☆　いいおとこ　カモ〜ン！！

父

僕の名前は「太」（たい）
妹の名前は「陽」（ひなた）
この安易は命名からも想像がつくように　僕の両親は　ごくごく普通の親である。
僕にこんな「力」があるということは　・・といろいろ考えてみたが突然変異なんだろうと疑わないほど　普通の親

・・・のはずだった。少なくともあの時まではそう思っていた。

父は　半導体の研究者で　忙しく各国を飛び回っている。
子煩悩で優しいが　頑固で無口な方だ。ひなの頑固さは父譲りだろう。

母は　マーケティングの仕事をしている。一時期家に入ったが
僕たちの成長とともに　仕事復帰した。
家庭より仕事をとるというタイプではないが　会社ではかなり頼られているらしい。

両親の過去についてなどは　興味も無く　聞いたかもしれないが全然覚えていない。
まぁ　今元気で仲良くやってりゃいいか　くらいの思いしかなかった。

小さい頃は　誰でも一度や二度は思うだろうが
本当に僕はこの人たちの子供なんだろうか　と思いっきり真剣に考えたほど
両親にも双子の妹にも　顔は　全然似ていない。

しいて言うなら　性格や考え方のが近いかもしれない
が、それは後からの刷り込みである可能性も否定できない。

そう思い始めたのは父・・
いや　きっかけはパソコンだった。

夜中　フリーズした自分のパソコンをあきらめて
父のパソコンを借りようとした時だった。

丁度その時も海外に行っていた父に　承諾を得るために電話をした。
父は　パソコンと言った時　「ぇ・・」っと聞こえないくらいの声で
何かあわてた様子が伝わった。
結局すぐに「わかった」と言ってくれたのだが
なんだろう・・何か違和感が残った。

まぁ　息子であっても見られたくない物や履歴があるんだろうと
そう思う事にして　パソコンを開いた。
別に・・・妙な期待をするほどのこともない　普通のパソコンだった。
なんか少し肩透かしをくらったような・・・　フッっと笑えた。

次の夜　なんとか自分のパソコンを復旧させ　父のを返そうとて
電源を落とした時である。

一瞬　何かが見えた！

な・・なんだ今のは・・・！？

普段自分のは　画面が消えるのを見てるなんて事は無いのだが
その時は　そのほんのわずかな瞬間を　予測したかのように
僕の目はしっかりと　とらえた。

あの・・あの文字だった。
たしかに
たしかに　僕がサイコメトリーをした時に現れるあの『幾何学模様
文字』だった。

もう一度・・
もう一度見ようと　電源を入れたり落としたりてみたが
二度とその文字は見れなかった。

見間違いか？疲れているのか？
いや・・
絶対に見た！　絶対にあの文字だ！。

しかし・・なぜ・・なぜ父のパソコンに・・

ひなたからの手紙

今日　久しぶりにたーくんのサッカー見ました。
超ーかっこよかったよー！
結果は・・・残念だったけどさ　仕方が無いよ。
だって　たーくんの高校バリバリの進学校じゃん。
世間じゃ　両立とかって調子のいいことというけどさ
そんなの　無理無理！！全国行くには　それなりの練習量が必要ってことよ。
公立高校の悩みってそこだもん。

ひなだって　そこそこいいところまでいってもさ
結局　個人で勝ち上がるには　それなりの練習量だったり　コーチだったり
プロ目指してるんかい！？って突っ込みたくなるような人が残るんだよね。
ましてや　サッカーとかチームプレーだし　難しいよ。
落ち込むな！！
頑張ってきたのは　誰よりもひなが認めるし！
たーくんには　勉強って他の輝きもあるんだもん。
こんどは　そっちで頑張れ！！

っていうか・・・
最近のたーくんってさ　なんか変だよ。
パパのパソコンじーっと見てたり　突然びっくりしたように　ひなの事見たり
話しかけにくいし　思い詰めてるって感じだし
なんか　悩んでるの！？。。。

恋!?　あー・・そっち系は残念ながら　お役には立てませんが・・・

（そうそう　ひなの友だちの麻奈覚えてる？
たーくんの事　超かっこよくて好みのタイプだーって言ってたよ。）
このこのぉ～!!もてるじゃねぇのさ!!うひひ。
まぁ　なんかあったら　相談に乗るよ!!

二人っきりの兄弟なんだし　同じ受験生だし
ど～んとかかってきなさい!!な～んちゃって。。。えへへw

じゃ　今度はひなの応援に来てね。

目

あれからずっと　パソコンが・・・というより
父が気になって仕方がない。

父が帰宅した時　わざとパソコンの話題に触れた。
「ありがとう。助かったよ。」
「おおそうか。よかった。」
「ところでさ　父さんのパソコンって変ってるね。」
「そうか？お前のと同じ機種だろ。」
「そう・・・じゃ勘違いか・・・」

父の中に何か変化や　動揺がないかと思って注意深く見ていたのだが
いつもと変らぬ穏やかさ　笑顔　なんということもない会話

やはり　僕の見間違いだったのか・・・

ひなたに　なんか変とか言われた。
そりゃそうだよな。
あれ以来　父も母もひなも　自分自身にさえ　何か釈然としない思いがあり
注意深く様子を伺ってるような気分だ。

そして　そんな平凡な毎日を打ち破るように
ある日突然　父が倒れた。

原因はよくわからないが　意識が戻らない。
何日かして　つきっきりの母と交代することになった。

父の顔を見ていると　いろんな事が思い出される。
旅行行ったこと　怒られたこと　部活のこと　受験のこと
今思えば　どれもこれも　僕のすべてを理解し　包み込んでいてくれた父だった。
早く　元気になれよ！！　心からそう思った。

しだいに　見舞い客がひっきりなしに現れ
なかには　外国からの訪問客というのもあって
父の交友関係の広さに　改めて驚いた。

ところが　その外国の見舞い客が　おかしな行動をとったのだ。
意識の無い父の顔を　じっと覗き込む彼の様子に　何か不思議な感じがし
席をはずすふりをして　視線から外れたところで様子を見ていた。

すると　周りを伺った後　彼は父の手に自分の手をかざし
大きくうなずいた・・　ような気がした。
うなずく？・・・
そして次の瞬間　僕は　彼の「目」をみて驚愕した。
「目」が・・・
止まっているのだ！！
止まっているとしか表現の方法が見つからないが・・・
色も動きも無い　無機質に止まっている道具としての「目」になっていたのだ。

な・・・なんなんだ！？　何をしてるんだ！？

僕はあまりの驚きに立ちすくんだ。
が・・・やがて　ハッと気づいた。

あの「力」だ。

『サイコメトリー』しているのだ

なぜ・・なぜ彼が・・なぜ父に・・・

しかし　同じ感覚を持った者として　触れてはいけない部分だと
瞬時に悟った。

彼は帰り際　流暢な日本語で「お大事に」と言い
そして　部屋をでる時　振り返って僕の顔を見つめ　ニヤリと笑った。
なんだかわからないが　ぞくっとする笑いだった。

彼について詳しく調べよう。そう思っていたのだが
それから先　注意深く様子をみると　そんな行動をする人が
代わる代わる現れるのだった。

どうなってるんだ!?
父の周りに　何故こんなにたくさんの「サイコメトラー」が・・・
そして　なぜ今ここに父のところに集まってくるんだ・・・

僕は今まで　この「力」を認めたくなかったし
自然発生的に起こることで　あえて自分からとか
ほかの誰かに試そうとか　全然考えた事もなかったが・・・

僕は決心した。

今夜　父に「サイコメトリー」をしてみよう。

映像

この「力」なるものを自分の中で認め
いざ　それを行使しようとしてみると・・・
どうすればいいのか　わからない。

まず　父の手を握り　心の中で呼びかけてみた
「父さん・・　父さん　太だよ。わかる？」
「僕がわかるなら　何か伝えて！・・」

何度やっても　何分たっても　なんの応答も変化もなかった。

くっそー　何もかも僕の思いすごしなのか？
僕の「力」も　彼らの「目」も　みんな勘違いだっていうのかよ！

そこで僕は　何人か見た彼らの動作そのものを　まねしてみる事にした。
えっと・・・手と手を・・・握手する方向じゃなくて・・・・
指が重なるようにして・・・

うわあああぁぁぁぁ！！！

映像が！！あの　幾何学模様文字が！！！

思わず手を離した。び・・・びっくりした。
不思議な事だが　『どうして？』　という疑問より
どこか『やっぱり』という確信の気持ちの方が　強かった。
落ち着け！もう一度だ！なんなのかを確かめるんだ！
次に父の手からその映像を読み取ろうとした時
父の意識が・・・一瞬戻ったような気がした。
「父さん！！父さん！！聞こえる！？」
だが　見た目変化もなく　意識はそのまま　混濁したままだった。
僕がこの「力」を使ったからか？何か僕に言いたい事があるのか・・・
・
慎重に　さっきと同じ形で手を重ねた。
（なんなんだ・・・この文字の集団は・・・読めない・・・
わからないよ　父さん！　これが父さんの心の中なの？
何かの暗号？　数式？　父さん・・・）
呼びかけ続けて　どれくらいたったのだろう。
その「力」を使うのには　思ったより体力がいることを初めて知った。
だいぶ疲れ　また今度にしようと思った時
父の手を通して伝わる　僕の頭の中のその映像に　何かを見つけた。

C・・Cだ！・・・・英語か！？・・・・
次は・・・O・・・・S？・・・・M・・・・O・・
≪C・O・S・M・O・・・・・　コスモ！？≫
僕がその5文字を見つけるのを待っていたかのように
父の手からは　もう何も伝わってこなくなった。

コスモ・・・・コスモ・・・・宇宙・・・・

ますます　分からない・・・

というか

父さん・・・父さんは　誰なんだ

そして　僕は・・・・・・何者なんだ・・・

メッセージ

どうすればいいんだ
父さん！　教えてくれよ！

【C・O・S・M・O】この5つの文字は　いったい　何を表しているんだ。
幾何学模様のなかにあった・・・この暗号は・・

コスモ・・・宇宙・・・まさか・・・
父さん？　父さんは　僕とひなの父親で・・母さんの夫で・・
それで・・・
それで・・・

いろんな事が一度に起きているにもかかわらず
なぜか　次々とはまっていくパズルのように
あと少し　あと少しと　真実へ向かっているという思いがあった。

「力」・・・「幾何学模様」・・・「文字」・・

そうか！　僕と父さんが共通するシチュエーションだ・・

僕は急いで　父のパソコンを開いた。
そして　大きく深呼吸をし　何も考えず動くと決めた。

真っ暗な画面を見た。
そうだ。ここからはじまるのだと思った。
僕は　迷わず電源を入れる前に　キーを押した。

C・・O・・S・・M・・O　そして・・・Enter

すると・・・
スイッチが入った。　いや・・・スイッチが入ったわけではないが
画面に　ボヤ～っと　例の幾何学模様が映り始めたのだ。

タッチパッドに僕の手を置く。
「力」を試した時と同じように・・・。

それは　映像ではなく　父の声らしい音声で　ただ　意識に入り
込んできた。
「サイコメトリー」とは　少し違うが　頭の中に自然と流れ込んで
くる音だった。

≪太。　とうとうその時が来てしまったようだな。
ここに辿りついたという事は　お前の力がもう充分だという意味だ。
これから話すことを　しっかり聞いてほしい・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

メッセージの続き

≪・・・・・・・・・・・・・・・・
私は　もうすぐこの地球での生命体としての使命を終了する。
今　父さんとしての私はどうなっているのだろうか。
たぶん意志とは関係ない状態でいるだろう。それが決まりだからな。

あぁ。最初から話そう。
お前の　父さんとしての身体を借りた。
私は　地球外生命体の意識を持つミュースという存在だ。
今　私の所に　コンタクトしてきている仲間がいるだろうが
彼らは　私の地球での任務を追従する者たちだ。
彼らは　次にはお前に接触してくるはずだ。

なぜなら　お前もまた　細胞レベルからのミュースだからだ。
双子という形で　お前の母さんの　妊娠分裂から入りこませた。
もちろん　母さんやひなたは知らないし　ミュースではない。
私達のことは　知られないほうがいい。　混乱させるだけだ。

びっくりしているだろうか。
お前のことだ　なんとなく　分かっていただろうか。
しかし　これは事実であり　お前の力が
いや　今この声が聞こえている　それが何よりの証拠だ。

お前には　お前の意志とは関係ないところで　ミュースとしての使命がある。

それが　太という人間の住む　地球という星にとって
喜ぶべき結果となるのかどうかは　まったくわからない。

まぁ　しいていうならば　すべては準備段階にあり
すべてが　調査の対象であるということだ。

といって　特別お前がすることは　今は何も無い。
私達がもっているこの「力」で知りえたことを　さらに伝えるだけだ。
お前を双子として送り込んだのは　そこからのデーターを得るためでもあったのだ。

私達が好むと好まざるとに関わらず　また
記憶として残っているかどうかにも関わらず
その膨大な情報はすべてデーター化され　次から次へと流れ　蓄積し　分析される。

お前にその使命が引き継がれることで　私は役目を終える。

私がミュースとして引き継いだ時と同じように
お前は今　狂気との境目にいるような気分だろう。

いろいろ聞きたい事もあるだろうが
残念だが　ミュースとしての答えはもう言えない。
だが　これだけは言っておく。

地球は今　いろんな意味で　危機に瀕している。
我々ミュースが　助けようとしているのか　潰そうとしているのか
それが　いつなのか。。。

私レベルのミュースでは分からなかったが
お前が人間としても　ミュースとしても優秀であるということは
もうすでに　上に伝わっている。

これから　お前はもっと過酷で複雑な世界へ飛び込まされるだろう。
だが　しっかりするんだ。

この地球を　どうするのか
その　すべての決定やすべての行動に　関わるところまで
しっかり　迷うことなく受け入れ　突き進め。

お前なら　きっと大丈夫だ。

頼んだぞ。

我らの仲間　太　そして　我が息子　太へ≫

どこかへ

何も・・・何も考えたくない・・・

ここに存在すること自体を　拒否したいくらいだ・・・

なんだよミュースって！　なんだよ　使命って！

勝手に　一方的に　こんな事を事実だと突きつけられても

理解なんか　できるもんか！！

父さん・・・父さんは・・僕の父さんなのか・・？

細胞レベルでは　親子　そして魂は・・仲間ってか！！？

なんだそれ！！！

あと数時間もすれば　母さんやひなが起きてくる。

普通にしていられる自信が無い。

それまでに　すべてを受け入れるなんて・・・無理だ・・・

どうすりゃいいんだ・・・

僕は・・・僕は　人間じゃないのか・・・！？

このショック状態を怪しまれないよう　周到な計画であるかのように
次の日　静かに父は逝った。
当然のように　パソコンも　普通のパソコンに戻っていた。

葬儀の細かい雑用に追われるうちに　少しずつ冷静さを取り戻し
考えるという行為そのものから　開放されつつあった。
今は　自分の運命や周りの環境を嘆こうが　恨もうが
涙や　ため息の渦のなかで　埋もれていられるのが有難かった。

たくさんの弔問客。
忘れたくても　忘れられない事実が　そこには待っているはずだ。
どの人が・・・どの人がミュースなんだ・・
僕に近づき　使命とやらを伝えにくるのは・・・どいつなんだ・・・

悲しいのか　悔しいのか　怒りたいのか　自分で自分の気持ちがわ
からない。
いつしか　恐怖にも似たこの焦燥感を　唯一理解するであろう「そ
の者」を
探す事でしか　自分の居場所がなかった。

しかし　僕の予想どうり　あの時の外国の見舞い客を見つけるのは
おろか
探せば　探すほど　見知らぬ人々に囲まれ　飲み込まれていった。

夜　ひと段落ついて　母やひなと三人きりになった。

この二人と・・・僕は・・・家族であって　家族でないのか・・・

あぁぁぁ・・・
二人の顔さえ　まともに見られない・・・

「太　今日から　三人。頑張ろうね。」母が言った。
「たーくん・・・」ひなは　泣き顔をいっそうクシャクシャにしながら　抱きついてきた

さ・・触らないでくれ・・・
今　ひなの気持ちまで僕に送り込んでこないでくれ・・・
そう思う気持ちが強かったのか　その時　僕の「力」は封印されたままだった。
いや・・
僕は　自らこの「力」を使おうとしたあの時から
自分でこの「力」をコントロールできるようになっていたのだ。

「ああ。大丈夫だよ。僕が二人を守るよ。」

そう・・・僕が・・・
守る？・・・はたして　そうなるのか・・・

混沌とした気持ちのまま　着替えようとした僕は　ポケットにそれを発見した。

パソコンの「メモリーチップ」だ。

誰が・・・・いつの間に・・・・

僕に近づいてきた者は　すべて最新の注意を払っていたはずだ。
それでも　気づかないうちにこんなものを・・・・

もう　その沢山の人々の顔を思い出す努力なんて　やめた。
分からないようにしたいんなら　そうすればいいさ。

このチップが　また一歩　僕をどこかへ押し出すはずだから。

どこかへ・・・

使命と運命

自分のパソコンにチップを入れ　父の時と同じように打ち込む・・・
C・O・S・M・O・・・・Ｅｎｔｅｒ　そして僕の手・・・
来た・・・。

≪ようこそ。気分はどうだね。
優秀な君のことだ　我々のリーダーになるべく　すべてを受け入れ
もう前を向いていると信じている。

さっき　君の手を通し　君が今までに体験してきたこと
つまり母親の体内記憶から　「僕が守る」と誓ったそのことまで
データーとして送られた。先に目覚めていた　妹からの記憶転送も
だ。

今は　君の意志は考慮されない。
しかし最近　我々が　君や　君の父親・・・ここではそう言うらし
いが・・・
それら情報源として送り込んだ肉体と　ミュースとしての意識レベ
ルが
なんらかの　摩擦を起こしつつあるようだ。

よって　君の「感情」もデーターにすることとなった。
もちろん　君だけではない　君の周りの人間の「感情」もだが。

なぜ　我々がこの地球という星を選び　何をするか・・・・
まぁ　君の意識が完全にミュースの指揮官として目覚めるのを待と

う。

さて　これからの君の使命だが
我々と自由にコンタクトできる場所があるだろう。
そこに行くべく　修練することだ。

それまで　我々からのコンタクトを拒否するのは　君の自由だが
近い将来　君が我々のリーダーとして
あらゆる決定権をもつことは　運命として受け入れなければならない。

よく考えたまえ。

君が「守る」と言ったのだよ・・・・。≫

そうだよ。
僕が・・・僕が守ってみせるさ！！
データーがなんだ！　危機がなんだ！！

ＮＡＳＡだろうが　宇宙だろうが　行ってやろうじゃねぇの！

僕が・・・
僕がそこへいくまで　待ってろ！！

使命と運命（後書き）

これから太はどうするのか？　運命はどうなるのか？

セカンドステージを　書こうか・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0832d/

コスモ

2010年12月9日12時27分発行